

# 「東お多福山ススキ草原復元」活動報告

秦 康夫

## 「概況」

六甲山系東お多福山の南斜面一帯は、かつてはススキが優先し、キキョウ、リンドウ、オミナエシ、ツリガネニンジンなど、様々な草原性植物が繁茂する生物多様性豊かな草原だった。これは人々が、肥料、飼料あるいは屋根葺き材としてススキを使用するため、年1回の刈り取り管理を行うことによって、この環境が保たれてきたのである。

ところが、生活様式の変化によってこうした草原管理が停止したことにより、繁殖力の極めて強いネザサの勢力が急速に増大し、背丈を超えるネザサが繁茂して地表を覆うようになった。このため地表に降り注ぐ太陽光がさえぎられてしまい、ススキその他の草原性植物の生育が困難なネザサ草原に遷移していくという現象が進み、更にまた、ゴルフ場開発、ヒノキの植林や樹木の侵入、山火事の減少などの要素も重なって、1948年には59haあった東お多福山の草原面積は、1995年には7haまで減少し、それも草原性植物のほとんど見られない種多様性の低いネザサ草原と化してしまった。

このような危機的状況の進行を食い止め、なんとか以前のような生物多様性豊かな草原を取り戻せないか、ということで始められたのが「東お多福山ススキ草原復元」活動である。「兵庫県立人と自然の博物館」指導のもと、「ブナを植える会」「日本山岳会関西支部」他、計5団体の協働により2007年11月から活動を始めたが、その後参加する団体も増え2011年に「東お多福山草原保全・再生研究会」という活動組織が正式に発足した。活動開

始から既に7年半を経過、毎回の作業参加人数も当初の20名内外から、今では50名～60名程度に増加している。

作業は、100 m<sup>2</sup> (10m×10m) の調査区 (コドラート) を6ヶ所設置し、更にその中にそれぞれ5 m<sup>2</sup> (2.5m×2m) のサブコドラートを設けて、各コドラート内の草原性植物の種数と被度を確認する植生調査から始まった。次にコドラート内のネザサと小灌木類の刈り取り作業、更にコドラート周辺に範囲を広げてネザサの刈り取りを進め、毎年5回 (早春、春、夏、秋、晩秋) の作業により、作業済み区画は見違える程明るくなった。特に、ネザサの選択的刈り取りを進めた区域ではススキの被度 (占有率) が約50%になり、一部ではあるがススキ草原復活の兆しも見えてきた。ススキが優先する群落では、今まで姿を見せなかったササユリ、キキョウ、リンドウなどが陽光を浴びて蘇り、また、オミナエシ、オケラなど、草原でしか見られない植物も増えてきて、通りかかるハイカーの目を引くまでになってきている。

## 2015年5月20日 (水) 9:00～15:00

作業項目：1) ネザサの刈り取りと植生調査  
2) 登山道の水切り溝整備

参加者約50名が、刈り取り班2組と植生調査班の3グループに分かれ、刈り払い機4台を駆使してNo.2、No.3調査区周辺のネザサ刈りを行った。同時に登山道の保全作業も進め、東お多福山山頂部から雨ヶ峠までのルートの水切り溝を整備した。

### 【参加者】

斧田一陽、秦康夫、森脇肇子、田島聖子 計4名

東お多福山草原の目標像をイラスト化！環境学習の教材作成をすすめています。

本研究会は、東お多福山草原をキキョウやオミナエシ、スズサイコ、ワレモコウなどの草原生植物や昆虫、動物などさまざまな生き物を学べる環境学習に活用できる場にするを1つの目標にしています。しかし、その目標像を言葉だけでわかりやすく説明することは簡単ではありません。そこで、東お多福山草原で様々な草原生植物が咲き誇る春、夏、秋の姿を水彩画で表現し、これを素材とした環境学習教材の作成をすすめています。

こどもから大人までわかりやすい資料となるよう、現在作業を進めていますので、みなさんのご意見を是非お寄せください。



春



秋



夏